

ムハンマド・ハキーム・ハーンとその著作『選史』について

河原 弥生

ムハンマド・ハキーム・ハーン著『選史』（1259年ラビー1月/1843年4月完成）は、普遍史、中央アジア（ブハラ）史、コーカンド・ハーン国史（メッカ巡礼記を含む）から成るペルシア語による浩瀚な歴史書であり、19世紀前半の中央アジア史に関する最重要史料の一つである。本書の主要部分である最終節コーカンド・ハーン国史（第5章第12節）は、君主の命によって書かれておらず、同時期に他に類する史料が存在しないなどの理由により、高く評価されてきた。報告者も、その重要性ゆえにペルシア語テキスト全文を校訂出版した（河原弥生・羽田亨一校訂『ムハンマド・ハキーム・ハーン著 選史』I-II、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2006（II）、2009（I）年）。しかし、その傍ら、著者自身の執筆の意図や、著者が構想したコーカンド・ハーン国史がいかなるものであったのかなどの問題は顧みられてこなかった。本報告は、このような問題意識から、本書の歴史史料としての性格とコーカンド・ハーン国史史料群の中で占める位置を検討した。

著者は、その出自と経歴ゆえにコーカンド・ハーン国とブハラ・アミール国の君主たちと密接な関係にあった。彼の父は、16世紀の高名なナクシュバンディー教団の指導者マフドゥーミ・アアザムの子孫であり、一族は数世代にわたってコーカンド・ハーン国の宗教面での要職を担っていた。母はコーカンド・ハーン家の出身であり、著者はアーリム・ハーン（1798-99～1810年）及びウマル・ハーン（1810～1822年）の甥、ムハンマド・アリー・ハーン（1822～1842年）の従兄にあたる。1806年に生まれた著者は、ウマル・ハーンの宮廷で育ち、幼少にしてナキーブ職に就いた。しかし、ムハンマド・アリー・ハーンの即位直後に失寵し、メッカ巡礼の許可を名目に追放された。彼の巡礼旅行は6年間におよび、ロシアやイランなど各地で君主や地方支配者との面談の機会を得た。中央アジア帰還後の1828年から1835-36年まではブハラのアミール・ナスル・アッラーの庇護下で、以後本書の執筆までは半独立の都市シャフリサブズで計15年の亡命生活を送った。このような彼の出自と経歴により、『選史』は君主たちの政治活動や宮廷生活を具に描写し得たのである。

本書の歴史史料としての価値をより正確に知るためには、著者の目撃談以外の部分と、そ

ここで彼が依拠した情報源を特定する必要があるだろう。そこで、著者の言及を手掛かりに『選史』執筆に利用された史料を探ったところ、第1章から第5章第10節アシュタルハーン朝ブハラ・ハーン史までの部分では、『新鮮なる源泉についての貴き学問 *Nafā'is al-funūn fī 'arāyis al-'uyūn*』、『ラーキム史 *Ta'rikh-i Rāqimī*』、『ムキーム・ハーン伝 *Tadhkira-i Muqīm khānī*』、『ウバイド・アッラーの書 *'Ubayd Allāh-nāma*』などが利用されていることがわかった。また、第5章第11節のマンガト朝ブハラ・アミール国史においては著者がブハラに亡命した1828年以降が、第5章第12節のコーカンド・ハーン国史においては成長した著者の諸事件への参加が始まる1818年頃以降が、著者自身の記憶に頼る目撃談であり、それ以前の時代は、著者の祖先などの身近な年長者からの口承情報に拠っていることも明らかになった。そのため、口承及び目撃談の部分、すなわちブハラ・アミール国史とコーカンド・ハーン国史の全てにおいて、話題が著者の一族と歴代君主との関係や各君主に対する宗教面での評価に偏る特徴が見られる。

著者は執筆の動機を明言しておらず、先行研究においてもこの点は看過されてきたが、本書の中にその手掛かりを見出すことができる。他史料からの引用部分における極めて短文の加筆において著者は、二度1258(1842-43年)年を「現在」と述べ、さらに別の箇所では同年ラビーII月(1842年5月)にアミール・ナスル・アッラーがコーカンドを征服し、ムハンマド・アリー・ハーンはじめハーン家一族を殺害した後の状況を「現在」としているのである。従って、本書は、ムハンマド・アリー・ハーンの死を機に起筆されたと考えられる。それゆえ本書は、コーカンド・ハーン国史の冒頭で、この王朝の統治期間と君臨した君主の数を過去形で挙げてさえいる。著者は、コーカンド・ハーン国を終焉したものとして、その滅亡に至る歴史を述べているのである。

実際にはこの後、ハーン家の傍系のシェール・アリー・ハーン(1842-1844年)が現れて即位し、ハーン国は存続することになるが、『選史』はその後のコーカンド・ハーン国の歴史書—その代表例は公定史書『シャールフ史 *Tārikh-i Shahrukhi*』—の執筆に利用されることはなかった。その理由は、上に述べたような本書の叙述傾向が、1842年以後の傍系家系の君主たちにとってハーン国史の説明としては不都合であったためと考えられる。

現存する『選史』写本のうち、作品の完成直後に作成された3点のペルシア語写本を除く3点のペルシア語写本と4点のテュルク語訳写本は全て1877年以降に筆写されている。『選史』には、ハーン国の(1842年における一時的な)滅亡の経緯の他、巡礼記中に当時のロシア帝国、オスマン帝国、カージャール朝イランについて豊富な記述がある。このような『選史』の価値が真に見出されたのは、皮肉にも、1876年のロシア帝国への併合によるコーカンド・ハーン国の完全なる滅亡後のことであつたのであろう。

(人間文化研究機構研究員)